

STRUM シュトゥルム

第 30 号 平成 28 年 1 月 11 日発行

新年あけましておめでとうございます。昨年末のリサイタルには多くの皆様にご来場いただき、ありがとうございました。独自のユニークな活動を続けることで、心の幅も広がる伊都さん、私たちも新しい事に果敢にチャレンジしたい！と思える年頭です。今年もTRAUBENをどうぞよろしくお願いいたします。

近況報告

昨年末の第 13 回リサイタルが皆様に支えられて、無事盛況のうちに終えられましたことを心より感謝申し上げます。

昨年はロンドンでの音楽活動が、クラシック、音楽の分野を越え、様々な代替医療、教育が試みられているイギリスならではの、文学、絵画等のみならず、筋肉反射を利用した医療やハーブ療法、心理療法とのコラボレーション、そして近年さらに増加を続ける子供の自閉症や発達障害のため、また難民の心のケアのためのワークショップでの活動など、音楽が様々に人の心に体に働きかけることができるという大いなる可能性に目が開かれた一年となりました。

また地元のパブでアイリッシュ音楽を、夏にはルーマニアでジプシー音楽のスピリットを教えられ、その土地に民族に綿々と受け継がれ、人と人とを継いできた音楽の楽しさ、躍動感に音楽の魅力を再発見しました。

音楽の持つ底知れないパワーとエネルギーを、今年はさらにもっと枠を超えて、でも初心は忘れずに土台にしっかり根付いた演奏をたくさんの方に聴いていただけるよう、心を込めて発信していきたいと思っております。

難民受け入れのためか、EU 脱退？テロリストはイギリス人が一番多い！？という混乱するイギリス政府の現状、またテロリストが芸術家を名乗ることが多いらしい…ことを反映してフリーで活動する音楽家にはますます厳しい状況となり、現在ビザ申請中で結果次第での渡英となる予定です。しばらく日本滞在となりそうですので、小さなコンサート、パフォーマンスをいくつかできたらと考えています。演奏を聴いて頂ければ幸いです。

【伊都】

第 13 回 加納伊都ヴァイオリンリサイタル

12 月 22 日、イルミネーション満開のみなとみらいで、例年より多くのお客様を迎え、リサイタルは開演しました。

今回の伊都さんのイチオシはブラームス：ヴァイオリンソナタ第 1 番「雨の歌」。この曲は「いつか十分大人になったら演奏しよう！」と楽しみにしておいたのだそうです。確かにしっとりとした哀しく切ない曲…松尾久美さんの流れるようなピアノの雨音と相まって、心に沁み入る美しい演奏でした。

それと対照的なのがエネスコ：「幼き日の印象」。日本ではまず聴くことのできないモダンで民族的な超現代曲です。伊都さんの師であるレムス・アゾイティ氏が、母国ルーマニア、エネスコのこの曲で博士論文を書き、ジュリアード音楽院を首席で終了したという曲で、ブラームスやモーツァルトとの対比が楽しめました。

最後の曲はラヴェル：ツィガーヌ！ 第 1 回のリサイタルで演奏した曲で、ここ 10 年は封印していたそうです。久しぶりに聴いた伊都さんの「ツィガーヌ」（フランス語でジプシーの意）は、彼女の前世はジプシーだった？と思うほどの迫力！本場での経験の成果は大きく、以前とは違う凄みがあり、ヴァイオリンが表現できる人間の感情の極限を聴いた気がしました。今後もどんどん世界で弾いてほしい一曲です。

終演後も感動は残り、生の演奏でしか伝わらない、魂に響く音を聴くことができる幸せ、を感じたコンサートでした。





いとちゃんの クラシック講座



op.24

アイルランド最大の祝祭、聖パトリックの祝日（3月17日）は、アイルランドでキリスト教を広めた聖パトリックの命日で、アイルランドでは5日間もの休日の間、パレードが行われフェスティバルが開かれるなど何世紀も受け継がれる伝統的なお祭りですが（横浜元町でも祝われているそうです！）ロンドンではアイルランド人が緑の旗（アイルランドの旗）を振ってひたすら一日中飲みまくって騒ぎまくる日として有名です。この日、ロンドンの街中は車が通行止めになるほどアイルランド人と緑の旗で埋め尽くされ、アイリッシュミュージックであふれかえります。

アイリッシュミュージックと言えばアイリッシュバイオリン、アイリッシュパブでお酒片手に陽気に奏でられる様子が有名ですが、実際、アイリッシュバイオリン（フィドラーともいわれる）奏者はお酒が入れば入るほど良く指が回り演奏が向上するようです。楽器自体はクラシックのものとまったく変わりはないのですが、同じ楽器とは思えないほど楽器の表面は松脂で真っ白、お酒がかかったり、傷だらけでささくれだったりして、弓は半分以下しか毛がない・・・など、楽器は大切に！きれいに大事に使わないと良い音がしない！と教え込まれてきた私たちからするとええ！と驚愕することたびたびなのですが、それにも関わらず楽しそうな音楽を奏でることピカ一です。楽器はだいたい親から受け継がれて来て、弾き方も家族から教わるのだとか。音符も読めない飲んだくれのおじさんが、煙草のやにで黒く染まったソーセージのような指で、高速パッセージを汗を飛ばしながら弾く様子は一見の価値あります。

【伊都】



DVD Classic Collection

作品 No.25

「別れの曲」

1934年 ドイツ

ショパン若き日の愛と苦悩を描いた名作



あらすじ

1830年、ポーランドではロシアの支配からの独立のため、反乱が起こった。若き日のショパンも祖国のために戦う決意だったが、同志や恩師は反乱を起こす直前に、国外の演奏会に出よう彼に勧めた。ショパンは愛するコンスタンティアにエチュードを捧げ求愛したが、彼女も彼の才能を救う為、嘘をついて別れる。パリではジョルジュ・サンドとの華やかな出会いが彼を待っていた。

見どころ

映画の原題は「エチュード作品 10 第3番」だったが、フランスと日本で「別れの曲」という題名になり、以後、曲名として長く愛され続けている。ショパン自身も「これほど美しい旋律を見つけることは二度とできない」とリストに言ったとか。男装の麗人ジョルジュ・サンドとフランツ・リストに才能を見出され、有名になっていくショパンの陰に初恋の純愛があった。

感想

日本でのフランス版の公開が昭和10年。再公開が昭和23年。当時のヨーロッパ映画の大作は、ドイツ版とフランス版を同時に同じスタッフ、別のキャストで製作したそうだが（吹替えがないので1カット撮影が終わる度に俳優を入れ替えた！）世界中で大ヒットしただけあって、今観ても面白い映画。大林宣彦監督は中学生の時に一週間、尾道の映画館に通い朝から晩まで観て、学校のピアノで「別れの曲」を練習したという。昔の映画は、戦いや恋愛の描写もソフトで心が和む。

*DVDはTSUTAYAの店舗でレンタル可能な作品のみをご紹介します

編集後記 今回のリサイクルでは、いつもと同じ告知の範囲にも拘らず、初めてのお客様も多く、認知度の広がりを感じました。／今回の選曲はご本人によると「ルノワールとピカソのような」面白い対比。クラシック曲の美しさとジプシー曲の激しさの両方を堪能しました。／でも、この両方があれだけ弾けるってすごいことだなーと思います。才能だけではなく海外で修業を積んだからこそその表現力は、異文化での多くの経験、見聞によるところが大きいのでしょう。／ビザ発行を渋る英国のお役人に、是非あの演奏を聴かせてやりたいものだと思います。／羽の重くなった私たちには飛んでいけない未知の空に向かって、今年も伊都さんには大きく羽ばたいてもらいたいですね。〈ゆ〉

発行：加納伊都後援会 TRAUBEN
〒231-0835 横浜市中区根岸加曽台 15
TEL：045-622-6780
FAX：045-621-6423
Email：trauben@itokanoh.com
Homepage：itokanoh.com